

老偉人の心境

救世軍中將 山室軍平

私は今、テモテ後書第四章について、晩年に於ける使徒パウロの心境を、學んで見たいと思ふのである。

パウロが悔改して、耶穌を基督と信仰するに至つたのは、多分彼が三十歳の頃のことであらう。それから三十五六年間、彼は貧苦窮乏に堪へ、反對迫害を凌ぎ、所謂七難八苦を突破して神の榮をあらはしつゝ、それにも拘らず、今はロマにて再度幽囚の身となり、最早何時ネロ帝の暴虐な刃に、首斬らるるかしない場合となつてゐたのである。彼が世に與ふる所は極めて多かつたに引換へ、彼が世から報いられた所は至つて薄かつた。殆んど皆無といつてもよい位であつた。斯る事情の下にあつた彼の心境は如何に。テモテ後書

第一、彼は良心の慰安を有した。こゝに彼は自らの一生を省み、その現在に對しては、我は今、供物として血を瀉がんとす。わが去るべき時は近づけりといひ、過去に對しては「われ善き職をたゝかひ、走るべき道程を果し、歸を守りし」と斷じ、未來に對しては「今よりの義の冠冕が爲に備はれり」と、言明するを得たのである。かくして彼は、頗る渾身の力をこめて奮んだ如く見たが、その胸中には何人も想像しかねる程の、大なる満足を感じたのである。彼は曾て總督ベリク

第二、彼は信賴すべき幾人かの友人を有した。固より他の半面には、彼に背き、彼を裏切つた者も多かつたが、それにも拘らず、彼は神かけて心と心と相許したる、少數の親友を有した。こゝに彼がテモテに書きおくりて、マスは此の世を愛し、我を棄ててテサロニケに往き、クレステンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに往きて、唯ルカのみ我とともに居るなり。汝マルコを連れて共に來れ、彼は職のため我に益あればなり。金細工人アレキサンデル大に我を憐れり。主はその行

第三、彼は良き書物を有した。基督なき生活は死である。書物なき生活は暗黒であるといふ人がある。然しなからパウロは、讀書の嗜みのある人であつた。如何程讀書に耽り、又如何ほどの苦難と戦ふ間にも、彼は讀書によつて、教訓と指導と激勵とをうくるこ

とを忘れなかつた。すなはちこゝに彼がテモテに向ひて「汝きたる時、わがトロアスにてカルボの許に遺し置きたる外衣を携へきたれ。また書物、殊に羊皮紙のものを携へきたれ」といふたのは、そのことを示すものである。所謂羊皮紙の書とは如何なるものであつたかは知りたないけれど、いづれ何か精選せられた良書であつたことを、信ぜべき理由がある。或人の調査によれば、使徒行傳にある彼の演説の中に、出エジプト記、申命記、民數記、ヨシヤ記、士師記、サムエル前書、同後書、列王紀略上、歴代志略上、詩篇、イザヤ書、ヨブ記、アモス書、エレミヤ書、エゼキエル書、ミカ書、ゼカリヤ書、ダニエル書、ホセヤ書、ハバクク書の諸巻に亘り、又彼の書翰中、舊約聖書を引用したる度数は、ロマ書七十四回、コリント前書二十九回、同後書二十回、ガラテヤ書十三回、エペソ書二十一回、ビリビ書六回、コロサイ書四回、テサロニケ前書七回、同後書九回、テモテ前書二回、同後書四回、テトス書三回にて、しかも當時は聖書の數が甚だ少く、又之を始終携帯するなどいふ事は絶対に不可能であつた故、彼が此等の引用も、概ね其の口頭暗記した處に基づきたるものと見ねばならぬ。又以て彼が如何に聖書を愛讀し、之に通曉したかが偲ばれるのである。

第四、彼は基督を唯一無二の力として頼んだ。わが始の辨明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり。願くはこの罪の彼らに歸せざらんことを。されど主われと偕に在して我を強めたまへり」と彼はいつた。いくら人から棄てられても、基督にさへ見棄てられねば、彼にとりては十分であつた。彼は基督に身を委ね、一切を獻げて忠實を擧げた。他の場合に彼が「我はわが主基督耶穌を知ることを願はれたために、凡ての物を損せしが、之を贖ふのごとく思ふ。」最早われ生くるにあらず

「救世軍報國茶屋」に對する 皇軍勇士及び家族の禮狀を讀みて

或日の「救世軍報國茶屋」



北支に「救世軍報國茶屋」が開始されたのは、昨年の初秋であつた。はじめは石家荘であつたが、當時、救世軍の皇軍慰問運動が、同地に進出するといふことは、到底不可能のことであると思はれてゐた。それほど戦雲が未だその邊に漲つてゐたのである。しかし、救世軍は宣傳に行つたのではない。皇軍の勇士に對し、幾分なりとも慰問の誠を示さずしてどうして見す見す引返すことが出来るやう、といふ信仰と熱誠とは、終に不可能を可能にしたのである。

「報國茶屋」にて、しばし憩ひ、紅茶を飲りて、報國ビスケットを嚼りつゝ、やゝ元氣を回復し、また或時は「シニコ」を満喫し、故郷の新聞に讀み耽り、或は散髪をなし、斯くて

勇躍、前進を續けられた勇士が、どれほどあつたかわからぬ。その勇士達が、備附のノートに、書きしるした感謝文は、眞率熱誠、勇士達の喜びに、感を深くしたのであつた。

「あゝよかつた。あれほどあつたかわからぬ。その勇士達が、備附のノートに、書きしるした感謝文は、眞率熱誠、勇士達の喜びに、感を深くしたのであつた。」

また、勇士達の寫眞を撮影し、それぞれ勇士達の家族に送つたが、それに對する禮狀が、机上に山を爲すほどである。出征してゐる勇士達の父から、母から、妻から、兄から、妹から、眞心のこもつた禮狀。その中の幾つかは「ときのこゑ」に掲載し

とを忘れなかつた。すなはちこゝに彼がテモテに向ひて「汝きたる時、わがトロアスにてカルボの許に遺し置きたる外衣を携へきたれ。また書物、殊に羊皮紙のものを携へきたれ」といふたのは、そのことを示すものである。所謂羊皮紙の書とは如何なるものであつたかは知りたないけれど、いづれ何か精選せられた良書であつたことを、信ぜべき理由がある。或人の調査によれば、使徒行傳にある彼の演説の中に、出エジプト記、申命記、民數記、ヨシヤ記、士師記、サムエル前書、同後書、列王紀略上、歴代志略上、詩篇、イザヤ書、ヨブ記、アモス書、エレミヤ書、エゼキエル書、ミカ書、ゼカリヤ書、ダニエル書、ホセヤ書、ハバクク書の諸巻に亘り、又彼の書翰中、舊約聖書を引用したる度数は、ロマ書七十四回、コリント前書二十九回、同後書二十回、ガラテヤ書十三回、エペソ書二十一回、ビリビ書六回、コロサイ書四回、テサロニケ前書七回、同後書九回、テモテ前書二回、同後書四回、テトス書三回にて、しかも當時は聖書の數が甚だ少く、又之を始終携帯するなどいふ事は絶対に不可能であつた故、彼が此等の引用も、概ね其の口頭暗記した處に基づきたるものと見ねばならぬ。又以て彼が如何に聖書を愛讀し、之に通曉したかが偲ばれるのである。

第四、彼は基督を唯一無二の力として頼んだ。わが始の辨明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり。願くはこの罪の彼らに歸せざらんことを。されど主われと偕に在して我を強めたまへり」と彼はいつた。いくら人から棄てられても、基督にさへ見棄てられねば、彼にとりては十分であつた。彼は基督に身を委ね、一切を獻げて忠實を擧げた。他の場合に彼が「我はわが主基督耶穌を知ることを願はれたために、凡ての物を損せしが、之を贖ふのごとく思ふ。」最早われ生くるにあらず

本年の克己週間成績は 金七萬五千六百八十四圓 七十七錢也 (但五月五日現在)

克己週間成績

本年度の克己週間成績は 金七萬五千六百八十四圓 七十七錢也 (但五月五日現在)

黙々として 本分を守る人

支那方面總隊司令長官は、横須賀鎮守府司令長官に榮轉、先頭、歸京されたが、その談話の一節に、

「戦争中、現地で感したものは、日頃、大言壯語してゐたもの必ずしも勇敢でなかつた。黙々として本分を守つてゐたものに、實に勇猛果敢な勇士を見つけたことであつた。」

回汝死に至るまで忠實なれ、然らば我なんちに生命の冠冕を與へん(黙二・一〇〇)

<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>	<p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p> <p>▼ 東支隊</p> <p>長官 五五〇〇〇 副官 二二〇〇〇 主任 一〇〇〇〇 計 八七〇〇〇</p>
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

神を愛する者の爲には 凡てのことと益となる

「神を愛する者、すなはち御旨によりて召されたる者の爲には、凡てのことと益となるを我らに知る。(ロマ八・二八) 凡てのことと益となる」といふパウロの言に注意せられよ。パウロは、使徒たり、傳道者たることによつて人々から嘲笑と侮蔑を受けた。彼らキリストの役者なるか、われ狂へる如く言ふ、我はなほ勝れり。わが勞は更におほく、鞭うたれしこと更に夥だしく、死に瀕みたりしこと屢次なりき。

田植はじまる



ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと五度、笞にて打たれしこと三たび、石にて打たれしこと一たび、破船に遭ひしこと三度にして一

「神を愛する者、すなはち御旨によりて召されたる者の爲には、凡てのことと益となるを我らに知る。(ロマ八・二八) 凡てのことと益となる」といふパウロの言に注意せられよ。パウロは、使徒たり、傳道者たることによつて人々から嘲笑と侮蔑を受けた。彼らキリストの役者なるか、われ狂へる如く言ふ、我はなほ勝れり。わが勞は更におほく、鞭うたれしこと更に夥だしく、死に瀕みたりしこと屢次なりき。

パウロが「凡てのこと」といふのは、前述の如き、肉體上の患難のみ云ふのではない。コリント人へのパウロの書を細くと、彼がどんなに精神的、心動的の煩悶と苦惱とを経験してゐたかが分る。全き純潔を望み、最善最良に懐れつゝも、強力なる肉慾になやまざる自分の姿を見て、感じ易い彼の魂は苦しみに苦しんだのである。然し、患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、いふことを知つてゐたパウロは、患難をも喜んだ。

彼は、信仰によりて、勝ち得て餘りあることを熟知してゐた。其れ故彼は患難をば「暫くの輕き患難」とよんだのである。パウロは、患難を、永遠の光に照して見た故、其等のものは、廣大無邊なる永遠の中に、影を潜め、彼は患難を見て、「暫くの輕き患難」といふことが出来たのである。而もパウロはかゝる加へて、患難は「相働きて益となる」とも云うた。我らが受くる暫くの輕き患難は極めて大なる永遠の重き光榮を得しむるなり。我ら願ふ所は見ゆる者にあらざればなり。見えぬ者は暫時に於いて、見えぬ者は永遠に至るなり。(コリント後四・一七、一八)である。

更にパウロは、「我らは知る」と云つてゐる。不信仰、懷疑、恐怖、疑問等は、一切、彼の中より消え去り、凡てのことと相働きて益となるを我らは知る」といふのである。如何にして彼は知つたか。如何にして彼は、斯る確信に達したか。彼は信仰によつて知つたのである。彼の魂の中に流れ込んだ暗黒の事どもを、信仰の光に照して見た。復活のキリストとの結合によつて、キリストの勝利は、即ち、彼の勝利となつた。

パウロは、数多くの患難に遭つた経験により、過去の「凡てのこと」は、彼の眞の標準を高め、神の恩恵を豊にしたといふ、確信を得たのである。パウロが、御聖意の中に在り、活ける葡萄の樹の枝として連り、キリストの體の一部となつてゐる時、彼は損ひ得る何物もなかつた。我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、然れども凡てこれらまふ者により、勝ち得て餘あり。(ロマ八・三五—三七)

知つてゐたから、彼は喜びつゝ患難に直面した。御言を信するならば、私共も亦、パウロの如き確信を、體驗するに至るであらう。精神的、苦惱、失敗、患難等が、精神的、苦惱、患難の平安なる果」とを結ばせることは、間違ひない。斯る果は、患難、練達に遭つたことのない人に生じないのである。

聖潔とは、私共の信仰を試みる、此等の面倒な骨の折れるものから私共を引き離してしまふものではなく、其の試練に打勝たせる能力を與へるところのものである。パウロは自分の患難を、キリストの患難の一部として考へた。キリストの患難は、十字架の上で終つたのではなく、御弟子たちの患難に於て完成されたのである。パウロは次の如く記してゐる。

「われ今なんぢらの爲に受くる苦難を喜び、又キリストの體なる教會のため我が身をもてキリストの患難の缺けたるを補ふ(コロ一・二四) 肉體的、精神的、心動的、何れの患難であつても、斯る精神で臨むならば私共は幸である。その時こそ、凡てのことと相働きて益となるを我らは知ることであらう。それは、私共をして他に益あるものとなし、謙遜と同情とに富ましめ、御聖なる果を、多く結ばせるに相違ない。」

男女學生を中心 山室軍平中將語る

學生祈禱會 五月八日(日)午後、山室中將は本營四階に於ける、學生のための小集會に出席せられた。これは神田聖別會に列席する男女學生諸君を中心として、お互の靈性の進歩をはかること、又その親睦をあつうしむる目的で開かれたものである。今後毎月一回は催される見込である。出席者三十餘名、瀨川大佐補の導で一同軍歌を歌ひ、祈禱の後、山室中將は起つて、かうした集會を計畫するに至つたわけを語り、諸君を個人的に知り、握手して別れた。

モテ前書四章十一節以下に基づき、讀書に心を用ふべき必要を語つた。讀書は心を用ふべき必要を語つた。讀書は心を用ふべき必要を語つた。讀書は心を用ふべき必要を語つた。



歸京した。日やけした顔、長くのびたヒゲ、見るから元氣さうであつた。植村大佐、瀨川大佐補その他、多數の戦友が歓迎した。柳川少佐はその朝、神田小隊の聖別會に出席、別項の如く證書をした。

海外ニユース 一年ほど前に、戦亂のスペインを逃れて来た兒童四百名を、イギリスの救世軍で引き取つて、その保護教育の任に當つて来たことは、既報の如くであるが、最後まで残つた百十八名も、最近に移管されることになつた。此の保護教育の爲、ハリイ・ゴード大佐補以下二十數名の職員が奮闘した。

禁酒同盟で 酒害相談所新設 日本國民禁酒同盟では、新に社會事業部を設け、厚生運動の第一着手として「酒害相談所」を開設し、併せて「酒害防衛委員」なる制度を設け、酒に悩める人とその家族等の良好相談相手となる、個人及び社會より酒害を除去し、國民體位の向上と後生活の安定を圖り、人的資源の浪費と國家體力の増強に資することとなつた。取扱事項は、酒毒矯正(酒中毒治療の指導)、飲酒者の家族の保護、學生の品行調査及び補導、店員徒弟職工の補導、結婚媒介(禁酒結婚による民族衛生)、其他酒害に關係する相談一般で、その爲毎日(但し日曜、祭日を除く)相談に應ず、料金無料、また通信相談も行ひ、家庭訪問、業行調査も行ふ。所在地は東京市神田區西神田一ノ二、同盟會館。

「屋茶國報軍世救」の南濟

救世軍中將 サムエル・フレンゲル

救世軍中將 サムエル・フレンゲル 救世軍中將は、確かに、凡ての患難が、相働きて益となり、神の愛と希望とを待ち望む、忍耐と練達とを生ぜしめたのである。患難は、心靈的に豊かな贈物を持来らすことを得ざる事である。

北支から 柳川少佐歸る

禁酒號を讀み 青年悔改む 日本救世軍本營の住所を知り、早速「きのこ」を注文して自分で見た上、友人にも見せたのだが、「きのこ」禁酒號を讀んだ或青年は悔改めて、熱心に信仰を求め、小隊にも来るやうになりました。それを見て、之は全く神様の恵であると言ふべきであります。(朝鮮開城小隊 軍曹 金光風)

昨年十月中旬、北支に向ひ、瀨川大佐補の片腕となつて「救世軍報國茶屋」の爲日夜奮闘した柳川少佐は、瀨川大佐補の佐佐木大尉と共に、引續き皇軍慰問に盡してゐたが、浦田大尉と交代し、五月十五日朝、東京歸著列車にて

昭和十三年六月十五日發行

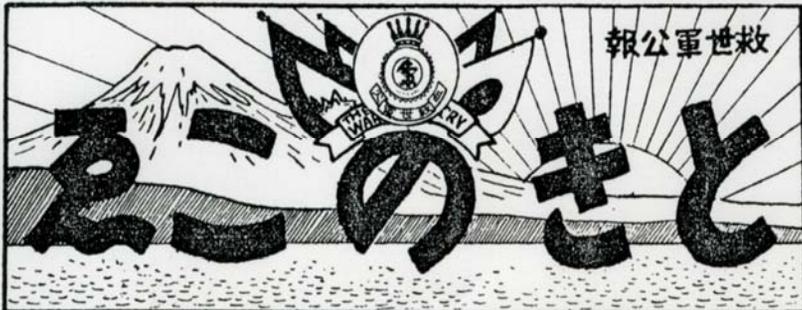
（毎月二回一日・十五日）

創立者

ウイリアム・ブリス○英國 倫敦 萬國本營

大將 エバンゼリン・ブリス○日本 東京 救世軍本營

大佐 植村益 藏



思ひ煩ふな

救世軍中將 山室軍平

「何を食ひ、何を飲み、何を衣んとして思ひ煩ふな」と、基督はいはれた。つまり生活問題を苦にするな、といふ御教である。實際生活は、貧乏に苦しむものである。振りたいたいは、病氣してもその手當が届かず、世間に義理を欠いて、したい親切も出来ない。そのため頭がぼんやりして、貧すりや鈍する。位はまだしも、思ひ煩つて、「貧の盗み」をする如きに至つては、最早忍ぶことが出来ないのである。生活は實に苦しい。然るに基督が「何を食ひ、何を飲み、何を衣んとして思ひ煩ふな」と言うたのは、一體どういふ意味であらうか。

人の身の上は十人十種であるから、支那事變前に比し、所得の増加したる者は、従来行ひ來つた程度の貯蓄の外、原則としてその増加所得の全部を貯蓄し、従来行ひ來つた程度の貯蓄の外、出来得る限り貯蓄を行ひ、以て統後に於ける國民の義務を果したいものである。

所得が増加したからとて、氣をゆるし、遊興に耽り、贅澤に流し、飲酒等に浪費することは非常時局に處する道ではない。皇軍將兵の奮戦を偲び、統後

貯蓄報國

今後わが國にて發行せらるべき巨額なる國債の消化を圖り、且必要なる生産力擴充資金の供給を圓滑ならしむる爲に、國民貯蓄の増加を圖ること極めて肝要である。

要である所から、來る六月二十一日から同二十七日まで一週間、國民精神總動員貯蓄報國強調週間を守ること、

然のみならず神を信する貧乏人は、貧しい生活を營みながらも、よく幾多の善事をなし得るのである。したがつて貧乏の中にも、その心には案外の慰安と満足とを樂しむことが出来る。昔から最も多く世のため人のために盡した人々は、概して貧乏人であつた。即ち釋迦

その上に神を敬うて忠實に働く者を、神は棄ておき給ふお方ではない。彼等が眞實を以て祈れば、その願を聞きいれ、せつばつまつた場合には、何とか逃るべき道を備へ給ふのである。聖書に神の御言を録して、「なやみの日に我を呼べ、我なんぢを助けん、而して汝

○オランダの救世軍士官候補生は、十日間合戦で、約百名の同心者を得、集會出席者延数は、大人六千以上、子供二千以上であつた。

○蘭領東印度軍國に新しい陸海軍ホームが開設され、デグルト中将指揮の閉館式には、西部ジャバの知事市長初め多数の來賓が列席した。

○南インド軍國に、五つの小隊が開戦され、その中の一つは、地方民が協力して會館を建てた。

○昨年新編成つたシンガポールの救世軍は、成功裡に進軍してゐるが、彼の地は各國人が雜居してゐることと、一同の野戰に六ヶ國語も用ゐることにあつた。

○昨年開戦したベルジャン・コンゴの



年少那支ゝるか抱に腕の愛慈の士勇軍皇 (影撮佐少軍世救川柳にて「屋茶國報軍世救」の南濱)

海外ニュース

○五月一日(日)、英國のニューキャッスルで、救世軍參謀總長指揮の青年部特別集會が催され、八百名の少年少女が出席した。

○六月五日(日)、アメリカ南部軍國の新しい士官學校落成式が、ヒギンス大將指揮の下に擧げらる。

榮譽の蔭に 節制、精進

力去、双葉山が續いて、六十六の勝星を得たとて、評判が高い。力くらべ、樂くらべに、どれだけ意義があるか知らないが、兎に角、人氣を呼んでゐる。彼が大分縣から上京した時は、體が

救世軍の短言

新救世軍士官の任命近し。來りて若き戰士の前途を祝へ。

積極的なれと、わが軍人の忠告、斯る軍人あるからは、救世軍の前途、望多し。

北支の「救世軍報國茶屋」は、齒科治療を開始した。浦田救世軍大尉(齒科醫)は大に腕を揮うであらう。

二十數年の努力水滸に歸す。と遺言して自殺した人があつた。將來に望はあつたものを。

國民の保健は、當局者の指導と共に各家庭、各個人の覺醒なくしては全うし得ない。

出征軍人の遺族の爲にとて、カナダの一人婦人から、寄附が届いた。日本に心を寄する者、海外にも少くないことを知る。

救世の大業に一身を獻げる男女がもつとあつてよい筈である。

滅多に出ない三十男の涙

皇軍勇士の眞率なる感想

左は柳川救世軍少佐が持ち歸つた北支の「救世軍報國茶屋」備附の記念帖に記された 皇軍勇士達の感想文の抜粋である。

□ 遠い異郷の陣中に、千萬言の慰問にまさる貴軍の御厚意、深く御禮申上げます。

□ 光は東方より、陣中慰問は「報國茶屋」より。(感謝生)

□ 感謝！ 皇國に盡す心は一つ「報國茶屋」(柴田興行)

□ 明日の生命を惜まぬ我々軍人の鬼をもひしく我が勇士の爲めの慰安所。

□ 感謝！ 一死報國を期す。(秋田)

□ 感謝！ 我等のオアシス救世軍。

□ 前線よりのたまの連絡に此の上無き慰安所、うれしく利用させていただきました。(兵士)

□ 異國の地に御慰問厚く感謝。共に守りませう帝國の生命線。(兵士)

□ 戦線に一日のリズムを築く。

□ 感謝！ 「報國茶屋」我は永久に忘れまじ。(川口)

□ 戦線に於ける救世の光。(金澤生)

□ 銃とる兵も、救世軍も、皆世の爲人の爲、盡す誠は皆一つ。(中田信則)

□ 救世軍に感謝します。戦線に於て、着音器を贈けるとは思ひませんでした。戦線の月を聴く時、子をせもつ私達は、何かしら目頭が熱くなりました。一死報國以て皇軍の本分を完うします。(川鍋信一)

□ 兵士のほんたうの慰問使となつて下さつたことを御禮申上げます。(吉野)

□ 戦線の清南「報國茶屋」のお茶で何をやるはず心地よさ。(増田)

□ 母國の味を味ひたくば、兄弟等来れよ「報國茶屋」に。(兵士)

□ 征旅既に半歳、初めて知る神の世の深き情を感じ、感慨無量なり。大場

カ

□ 常に無聊の第一線に働いて、影の如くつき添うて、愛の御奉仕を下さる北支に於ける

「救世軍報國茶屋」の皇軍勇士の記念感想文から

陣中、兵は泣く

報國茶屋で

涙は泣く

報國茶屋

日本のチ厚志

感謝の心で

元氣百倍

前線へ

送る

茶屋

の

御

厚

意

を

以

て

す

帝都を訪れて

盛場を訪れて

非常時下の日本の帝都の盛場、銀座の裏を戸毎に訪れて、其の淫靡情な有様を見、甚だ寒心に堪へざるものがあつた。女給等の虚飾と媚とに感ずる。

其の口より出づる愛の進行曲を聴いて恐らくは、此の歌の作者が、此の有様を見た時、泣かざるを得まいと思つた。女給の姿は、憎むべしといふより、悲しむべき憐れむべきものと感ずられた。私は獨り心の中で叫んだ。如何なる法規が出来ても、彼等を善良な幸福な者とならざることは出来ないのだ。たゞ十字架の血潮によつて、新生した者のみそれが可能なのだ。彼等を撃つよりも、彼等の靈魂の爲に祈り、且燃やせねばならぬのだ。私共が對してやらねばならぬのだ。又入口に立つボーイを見て、腹々憤慨させられる。將來の日本を背負ふ青年が、而も非常時下に、此の淫靡なる増場の案内者たるとは。一人だに斯る人物の存在することを許さず、彼等から何と。何と。か方法手を講じて、彼等に聖なる父を知らせ、教に導かねばならぬ。又、此の見るに忍びざる中を、辻占を賣る少年少女を見て、胸を突かるとが如くに感じた。砂埃の服を穿たる三人の子供(おかつば頭の女の兄に、二人の男の子)を、おちやん、買つて頂戴。と辻占を出して買つて歩く姿。私は涙ぐみつゝ、しばしその後姿を見つめた。再び私は心に叫んだ。あゝ彼等に父母はあるのだらうか。彼等はこんなことをしなければ、生活出来ないのだらうか。お、不幸なる彼等よ、幼き純眞なる心の持ち主の此等の少年少女が、此の淫靡なる空気の道を歩いて、その純眞なる魂に傷つけられればよいが、心配にはなるが、どうして彼等を救ひ出してよいものか分らない。心には思ふのだが、手段が分らないのである。その時、私の胸に響いたことは、うまたにさすらひやみにおちゆく一人の乙女も世にあるかぎり、といふ軍歌であった。現實に眼のあたりに見る此の有様、うまたにゆまず戦はねばならない。殊に青少年を救へ！ これこそ將來に、イエスの御國の擴張を期待させる、第一歩ではなからうか。(京橋の或小队候補生の日記より)

す。(兵士)

□ 地の極まで、聖名に榮光あれ。基督の血に依りて、結ばれたる貴兄弟等の雄雄しく異郷にありて、御戦せらるゝを多謝す。涙と共に祈くものは、喜びと共に刈りとらん。救世軍の皆様の御厚意、主にありて感謝す。(羽賀少尉)

□ 休み、紅茶の一杯貴し千金に當る。あゝ感謝致します。

□ 近くの御兵所をのぞいた時、「報國茶屋」の話を聞き、無言で室内に一步入る。ボーイの出す茶を一口に飲み、煙草に火をつけて、聞いたのは「戦線の月」だつた。何時の間にか目頭が熱くなり、煙草を取落しました。御慰問の意と歌とに感激の餘り、胸が一杯になつて、両手を合しました。めつたに出ない三十男の涙。昨年〇月以來、北支四百里の道を歩き、数度の激戦もなし、戦死した戦友にも、此の紅茶を飲ませ、メロデーを聴せてやりたかつた。思へば故郷離れて以來、初めて耳にする音器だつた。何時までもレコードに聴つてゐたかつたが、もう時間がない。生命があつたら又何はう。

□ 嬉しい今日の日は、唯一死を以て報いん。(A生)

□ 慰問茶屋見る度事にも又も飛び込むらかき。(熊本)

□ 陣中の「報國茶屋」で兵は泣き、かなしみの涙か、否軍舌に盡し難き感謝の涙だ。(三木生)

□ 「報國茶屋」日本の御厚志感謝の二字で、元氣百倍前線へ。(山岡良助)

□ 好きなレコード紅茶の味で語るや戦友勝ちいさ。(田村)

□ 懐かしき救世軍に巡り逢うて。(高久伍長)

□ 聖愛真士に及び難し。(高久伍長)

□ 「報國茶屋」の一日で内地気分。感謝！(石月生)

□ 一生の思い出「報國茶屋」(一特務兵)

救世軍中將 山室軍平 著

新 民衆の詩篇上

刊 聖書詩篇

四六判三四頁 定價八十錢 送料九錢

一度おためしになつたら必ずお好きになる

新柄 コレアンタクロス (朝鮮綿布)

入荷

(郵券五錢封入御申込 次第見本送呈)

無地、柄物等百數十種あり

新救世軍 山室軍平の面影

附救世軍事業報告

定價十五錢 (送料三錢)

秋元 佐少軍世救

新生の道

四六判二五七頁 定價五十錢 (送料六錢)

救世軍供給部 夏期輕井澤出張所

七月一日開店

東京市神田區神保町 (電話九段四七九二三四) 救世軍出版及供給部

BOOTH
ER
BOOTH
al
quarters
ria Street
land
EMURA
il
immanier.
adquarters
kyo.

定價及び送金
印刷人 植村益藏
秋元巳太郎

天地創造の神

地球の直径は約一萬三千里... 太陽の直径は地球の約百倍以上も大...

紀元節 奉祝祈禱會

紀元の佳節、朝八時四十五分より、神の救世軍中央會館にて、紀元節奉祝祈禱會を開いた。

これだけ聞いても、如何に此の宇宙が偉大なものであるか... 神が天地を創造した...

報國茶屋の せんざい接待 兵隊さんよろこぶ 一月四日は、翌五日のせんざい日の準備をなし、小豆を煮、白玉粉をね...

紀元の佳節、朝八時四十五分より、神の救世軍中央會館にて、紀元節奉祝祈禱會を開いた。



北支から 浦田救世軍大尉歸京 浦田救世軍大尉は、昨年四月二十一日東京歸京後、北支濟南に於ける「救世軍報國茶屋」にて、皇軍慰問、齒科治療...

濟南の南「救世軍報國茶屋」にての接待 兵隊さんよろこぶ

待、大歡迎、一月五日「皇軍慰問救世軍報國茶屋」といふボスターを出しました。...

村井翁記念會 山室中將語る

二月十日夕、救世軍村井學生會講堂にて、故村井保國翁の記念會を營んだ。

二月十日夕、救世軍村井學生會講堂にて、故村井保國翁の記念會を營んだ。

町田救世軍大尉歸還 甲府小隊長町田救世軍大尉は、さきに召集を受け、出征して各地に轉戦...

傷病軍人に「しるこ」接待 救世軍家屬員が、陸軍々醫學校治療中の傷病軍人に、勤務奉仕を續けてある...



救世軍中央會館に於ける 救世軍音樂會(二月一日披露)

北支で コーヒー喜ばる 先頃、ハワイのヒロ、ホルナル兩救世軍小隊から「救世軍報國茶屋」のため...

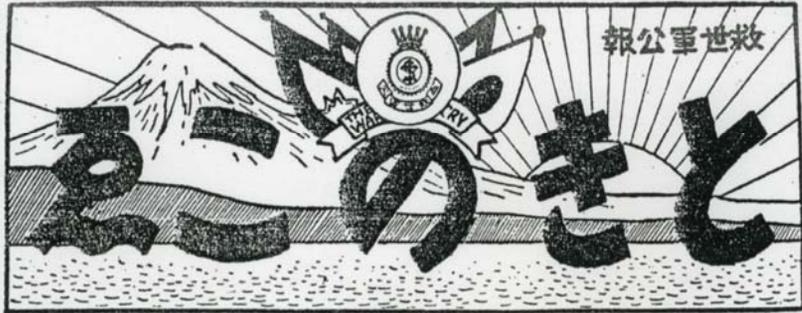
「喜」の字の祝 青木庄藏氏 大坂の青木庄藏氏は、今年七十七歳になり所謂「喜」の子の齢に達した。

「禁酒號」發射挿話 カフエーやパーに出あふとまるで好評を見つけた軍人の如く、飛込んだ行くと...

「喜」の字の祝 大坂の青木庄藏氏は、今年七十七歳になり所謂「喜」の子の齢に達した。

海外だより 健康を回復したエバンゼリン・ブリス救世軍大尉は、一月八日(日)英國マンスターで説教され、五十七名の同心者があつた。

海外だより 健康を回復したエバンゼリン・ブリス救世軍大尉は、一月八日(日)英國マンスターで説教され、五十七名の同心者があつた。



昭和十四年四月十三日印刷
第三種郵便物認可
昭和十四年四月十五日發行 (毎月二回一・十五日)

創立者

ウィリアム・ブリス・オズボーン 倫敦 萬國本管

大將 エバンゼリン・ブリス・オズボーン 東京 救世軍本管

大佐 植村 益 東京市本郷區眞砂町三十六番地

WILLIAM EVA Internat. Q. L. MA. Terri Terri

◆儲金 振替貯金(東京四〇〇番)宛名は救世軍 本管によるが最も御便宜に候

印刷所 東京市本郷區眞砂町三十六番地 日東印 株式會社

救世軍 救濟報國

國民精神總動員

舉國一致長期建設

救世軍中將 山室軍平

善を行へば如何なる報を受くべきかと尋ねてはならぬ。善をなし得ることが、既に善人にとつて最大の恩寵である。善をなすのは神の恩寵である。又人生唯一の神の恩寵である。又人生唯一の神の恩寵である。又人生唯一の神の恩寵である。

善人が受くる祝福

善人が受くる祝福は、その最も著しき實例である。私共が悔改めて基督の救を受けた結果は、善人となつて、以來いくらかでも善事を行ふ者となる。前には無用有害の生活を營んだ私共が、今は罪から救はれて、幾分にも善事を勵むに至るといふのは、どういふ大なる恵であらう。たゞそれだけでも私共は神から十二分の恵を受くるものというてよいのである。それにも拘らず、神は恵を加へて、尙その以外に、私共の心霊上物質上の種々なる祝福を加へ給ふのは、如何にも有難いことである。



北支南一昨年来り皇軍慰問の「救世軍報國」茶屋を営みつつあつた柳川救世軍少佐が支那人に無料散髪を営む

第一、神は善人の胸の中に、良心の慰安を與へ給ふ。何人が如何やうに憂へてくれても、良心に疚しう所があつては堪へきれない。け

第二、神は善人の身の上に福を與へ給ふのである。他の境遇事情を同じうすれば、善人は概して

第三、神は善人のなす所を榮えしめ給ふ。概していへば、徳は得である。理は利である。正直律儀に事をなす者の、その爲す所が繁榮に赴くのは、さもあるべきことである。木會の山中に一軒の宿屋があり、先祖代々一つの徳利を家寶として、大事に保存して居る。そ

悪人よりも健康なものである。又長壽なものである。酒を飲まない人は飲む人よりも、平均十二年長生きするといふ如きは、その一例に過ぎない。

第四、神は善人に幸福なる家庭を營ませ給ふ。主耶穌を信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救はれんとパウロがいつたのは、ほんとうのことである。基督の救が家庭に入り來る時、親子、夫婦、兄弟の間の交情が新しくなる。互に眞實を以て盡し合ふやうになるから、これまで味ひ得なかつた幸福を、味ふことが出来るやうになるのである。

第五、神は又その僕らを用ひて他

第六、神は又、善人を恵んで、その子孫をまでもさいはひし給ふのである。

第七、神は又、私共が此の世の旅路を終りたる後に、これを天上の聖き御國に導き給ふのである。「それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり。すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり」とあるのは、その謂である。神が善人に與へ給ふ祝福は数かぎりもない程多いことを知つて、感奮興起する所ありたきものである。

宗教

團體法案

宗教團體法案は、貴衆院を通過し、いよいよ實施されることとなつた。初めて「宗教法案」が議會に上程されたのは、明治三十二年で、それ以來、幾多の活動に待つものが多く、一層その必要を感ずるが、殊に目下の時局は、實なる國民精神の涵養は當然のことである。宗教に當るべきものが多く、私共はその精神の涵養に力を盡さなければならぬ。宗教の眞價を發揮するに努めると共に、之が保護、監督の任に當るべき人が、能く宗教を理解され、法の運用しきを得、以て法案制定の目的を達せらるることを望んでやまない。

宗教は異つても、宗教を異にする、互に敵に對するやうな感じを抱くことがあるが、心からの親切といふものは、宗教の異同を忘れしめるものである。救世軍家國團員が、九一年間、病院收療中の傷病軍人に勤務奉仕をしてゐるが、戦傷の上、病氣で一時重態に陥つた、僧侶らしき軍人が居り、一家庭員は奉仕を終ると、その人を見舞ふのを常にしてゐるが、治療の甲斐あつて、近來快癒に向つた。見舞ふたびに喜び、看病のため上取してゐる夫人と共に感謝するその有様は、宗教は異つても、人の眞情は相通することを示すものである。

天長節！ 聖壽萬歳を祈り奉る。此の佳き日、心から祝ふ一億の民。「救世軍克己週刊」の成績、神を讚美し、一般の理解ある賛助を感謝し、戦友の奮闘に感激。

諸國神社の臨時大祭、護國の英傑を偲ぶと共に、御遺族の心慰められんことを祈る。

東亞の新秩序建設の礎石となられた勇士の勳は、永久に残る。

代議士から救世軍士官になつた

村松愛藏参軍逝く

信仰に生きた後の三十年

「村松愛藏君は國士である。少壯志を立て、政界に入り、或時は新聞記者として、自由民権の爲に奮し、或時は所謂飯田事件の張本人として擧兵を企て、或時は他日、近東に事あるべきを察して、逸早く歐亞大陸の旅行を試むるなど、何れも皆愛藏の熱情と、經國済民の抱負とに出ざるはなかつたのである。其の代議士たるの日、誤つて一たび法網に觸れたに拘ら



はんとしてゐる。などと、夫人に向つて大説教を試みたやうなこともあつた。死ぬる當日の朝、飯が食べたいと言ふので、買つて来て口に入れて食べた。食べなかつたこと。何故飯が食べたいのかと訊くと、大海で一番大きな飯を食べて見たいからと答へたといふことである。翌十二日夜、瀬川大佐補弔式に納棺式が擧げられ、同二十二日午後二時、山中將司式の下に、救世軍中央會館にて葬儀が営まれた。

す、翻然として悔改め、基督の救を求めて、新しき生活に入られた態度は、如何にも見事であつた。古人が「君子の過は日月の食の如し、過てば人皆之を見る。更むれば人皆之を仰ぐ」というたは、全く此の場合の、君に當嵌まる言であつたやうに見える。

とは、嘗て山室救世軍中將が、村松(愛藏)救世軍参軍に就て言はれた所である。村松参軍は去る四月十一日午後四時三十分、麻布の自宅に於て、いと安らかに御國に凱旋した。享年八十三歳であつた。病床に横はるやうになつたのは、昨年の十一月からで、死ぬる一週間程前は、夢で戦友の所を駆け廻り、死ぬる三日前は、もつれ跡の舌を以て「神は兩れる此の世を清めん爲に、私を用ひ給

氏は救世軍の一兵卒として働きたい旨を申出たのである。多年政治の爲に盡し、嘗ては自由民権の爲に活躍したが、今彼の前に展開された新天地は、實に心懸の原野であつた。

明治四十三年一月三日、神田橋畔の和強堂に救世軍特別集會あり、その時、血と火の軍旗の下に、救世軍兵士として入隊したのである。更に進んで救世軍士官を志願し、受け容れられて、夫人と共に士官候補生となつた。その年の暮、救世軍社會科運動あり、村松候補生は自ら進んで日比谷公園の角に立つた。折柄、議會の開院式の日になり、舊知の代議士達が人力車に乗つて其處を通るのを見、獻金を求めるとわきま、車から下りて、銅金を入れて行く者もあつた。

同十四年五月、救世軍見習大尉となり、京橋小隊長に任ぜられた。夫人と共に野戦に、ときこのゝに奮戦し、營内集會に、しきりに奮戦し、岡山、横濱の各小隊長を務め、大正二年、本營に入り、身の上相談部の擔任者となつた。大正三年一月より大正十二年に至る統計は、關東大震災で焼失してしまつたが、取扱つた件数は二萬件に近い。

大正十三年一月より昭和四年六月までの合計は九千五百件に上るのである。足かけ十九年間、停年は六十五歳であるといふ、七十七歳を超えるまで、現役にとつて、惱める者、悲しめる者と友となり、昭和四年六月、退職されたのであつた。参軍は「退職してから身替が弱つた。生涯の結論がなくなつた」と口癖のやうにいふてゐたといふが、信仰に入り、救世軍兵士となり、更に士官となり、その終を余さぬことは即ち結論ではなかつた。立派な結論ではないか。善き職をたかひ、走るべき道程を果し、信仰を守つた老参軍、義の冠を戴いたではないか。夫と共に戦ひ、また日夜看病に盡された夫人の上に神の御恩を祈る。(寫眞は村松参軍)

日支親善は婦人から

濟南に著いた佐藤院長一行

濟南に著いてから今日は第三日目、救世軍報國茶屋は早朝から御奉仕に忙がしく、「愛國行進曲」や「父よあなたは強かつた」等が、それからそれへとひつきりなしに響いて来る。ピンポンは夕陽迫るまでも休みなく、これ亦兵隊さんに喜ばれてゐる。山崎女醫もなかのチャンピオンで、兵隊さんの御相手は「報國茶屋」に一段と活氣を添へてゐます。理髪部も次から次へと

藥石言

人の有するもので、長く残るものは金錢でも榮譽でもない。品性の輝である。自己の地位を築くことよりも、神の御榮を如何にして輝かすか問題である。人より多く勞して榮を人に歸する者に、天使は喝采を送る。人は各々自分に都合のよいことを考へる弱點を有する。世界の惱は神を忘れてゐる所に在りはないか。

全くと云ふでもない。〇〇部隊、〇〇部隊と、あちからもちろちからも兵隊さんが訪ねて来て、「報國茶屋」は相違らず良き慰安所となつてゐる實際を見て、實に感謝の他ありません。私共、醫務部も一日早く開院して、支那の人々に國人愛の實行をと、急いで準備してゐます。(中略)今日は柳川救世軍少佐の案内で、一同打ち連れて、各方面に挨拶廻りの後、診療所の下見分をしました。門も家も御殿造りの立派なものであります。少佐の骨折により、修理を施され、すつかり綺麗になつてゐます。診療所の爲のみの部屋八室、中庭には幾百年かと思はる、大木があり、更に奥庭にさと重みとを加へて

濟南の「救世軍報國茶屋」ピンポンに勞苦を忘るゝ軍人



濟南の「救世軍報國茶屋」ピンポンに勞苦を忘るゝ軍人

診療班徐州慰問

徐州慰問に行つて来ました。徐州では深川小隊長の善勇團分隊長たりし深谷君を迎へられ、徐州慰問を偲び、今もなほ第一線といふ気分が致します。(中略)〇〇では小谷野君を迎へられ、〇〇部隊長の御歓迎を受けて、診療班としては大抵よい慰問であつたやうです。専門的にも教へられるところがあつたと思つてゐます。山崎女醫の獨唱、看護婦さん達の合唱、私のコーネットなどとして、一寸した勸話をしました。



診療班徐州慰問

母と人傑

西郷隆盛は小兒の如くに老母を抱きて入浴せしめたといふ。頼山陽は母を伴うて、春の吉野山に遊び「これでわしの願も叶うた」といふ母の言を聞き「母のその言を聞き、宰相になつたよりも、満足である」というた。ラレーは「自分の禮儀作法は一切、母のお蔭だ」と言つた。ゲーテは其の著書中に、幾度か母の慈愛なき品性に感謝してゐる。アラハム・リンカーンは「私の今日あるは、又、將來の希望も亦、天使の如き我が母のお蔭である」と言つた。ギボンの母は非常に讀書を愛し、彼の息子にもそれを勧めた。ピーチヤーは嘗て言つた「我が母に就ての聖なる記憶こそ、我が幼年時代の最も輝かしい想出である。ライマーテンは非常に賢明なる母を有つてゐた。彼は著書中に、幾度か母に眞心からの感謝を獻げてゐる。ビットは、彼が政治家になつたのは、母が政治を好んだことによると言つた。ペートル大帝の母は大膽不敵な女丈夫であつた。

ミケランジェロの母は、息子と同じやうに、英雄的な品性の持主だつた。彼は嘗て言つた「人がどんな者になるかは、大抵、その母による」。チャールズ・ダービンの母は博物學の凡ゆる部門に對して、深い興味を有つてゐた。シドニー・スミスは母は話上手で、當意即妙だつた。シューマンの母は天才的な音樂家だつた。ミルトンは其の書翰中に、母に對する深い愛情のこもつた言を記した。



種播く者の譬

「種播く者まかんとて出づ。播くとき路の傍らに落ちし種あり。鳥きたりて啄む。土すき地に落ちし種あり。土深からぬによりて速に萌え出でたれど、日の昇りし時やけて根なき故に枯る。茨の地に落ちし種あり。茨のたぐりて之を奪く。良き地に落ちし種あり。或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の實を結べり。(マタイ一三・一二一三)

この譬は、イエスがガラヤ湖畔に於て群衆に語り給うたもの一つである。その意味に就いては、イエス御自身が、同章十九節以下に説明を加へておられる位であるから、あまり多く語る必要を認めない。

「我らの心は、遂より出でず、汚穢より出でず、説教を用ひず、神に委ねられて福音を授けられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を聖給ふ神を喜ばせ奉らんとして語るなり。(マタイ一三・二三) 斯くしてあるキリストの使徒は、その前に「それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみならず、能力と聖霊と大なる確信とに由れり」と言つてゐる。彼の福音は確信から出たのである。その動機は清かつた。その爲す所は眞實であつた。それは人を喜ばす爲ではなく、心を聖給ふ神を喜ばせ奉らんとして語つたからである。

「我らは汝らの知るごとく、何時にても説教の言を用ひず、事によせて懲責をなさず、(神これを證し給ふ) キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らに他の者にも、人よりは譽を求めず、汝らの中にありて、優しきこと、母の己が子を育てやしなふ如くなりき」とある。眞實と眞實とは兩立しない。我らは人の金銀、衣服を賣りし事なし(使二〇・三三) 彼の潔白を此處に見る。深き皮相の心である。福音の種を受容れないのではないが、下が固いから深く根を下すことが出来ない。御言をききて、直ちに喜び受くれども、己に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言のために艱難、あるは迫害の起るときは、直ちに躍くものなり。(マタイ一三・二〇、二二)

「我らは汝らを知るごとく、何時にても説教の言を用ひず、事によせて懲責をなさず、(神これを證し給ふ) キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らに他の者にも、人よりは譽を求めず、汝らの中にありて、優しきこと、母の己が子を育てやしなふ如くなりき」とある。眞實と眞實とは兩立しない。我らは人の金銀、衣服を賣りし事なし(使二〇・三三) 彼の潔白を此處に見る。深き皮相の心である。福音の種を受容れないのではないが、下が固いから深く根を下すことが出来ない。御言をききて、直ちに喜び受くれども、己に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言のために艱難、あるは迫害の起るときは、直ちに躍くものなり。(マタイ一三・二〇、二二)

「我らは汝らを知るごとく、何時にても説教の言を用ひず、事によせて懲責をなさず、(神これを證し給ふ) キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らに他の者にも、人よりは譽を求めず、汝らの中にありて、優しきこと、母の己が子を育てやしなふ如くなりき」とある。眞實と眞實とは兩立しない。我らは人の金銀、衣服を賣りし事なし(使二〇・三三) 彼の潔白を此處に見る。深き皮相の心である。福音の種を受容れないのではないが、下が固いから深く根を下すことが出来ない。御言をききて、直ちに喜び受くれども、己に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言のために艱難、あるは迫害の起るときは、直ちに躍くものなり。(マタイ一三・二〇、二二)

「我らは汝らを知るごとく、何時にても説教の言を用ひず、事によせて懲責をなさず、(神これを證し給ふ) キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らに他の者にも、人よりは譽を求めず、汝らの中にありて、優しきこと、母の己が子を育てやしなふ如くなりき」とある。眞實と眞實とは兩立しない。我らは人の金銀、衣服を賣りし事なし(使二〇・三三) 彼の潔白を此處に見る。深き皮相の心である。福音の種を受容れないのではないが、下が固いから深く根を下すことが出来ない。御言をききて、直ちに喜び受くれども、己に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言のために艱難、あるは迫害の起るときは、直ちに躍くものなり。(マタイ一三・二〇、二二)

信仰讀本 此の眞實、此の愛

「我らの心は、遂より出でず、汚穢より出でず、説教を用ひず、神に委ねられて福音を授けられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を聖給ふ神を喜ばせ奉らんとして語るなり。(マタイ一三・二三) 斯くしてあるキリストの使徒は、その前に「それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみならず、能力と聖霊と大なる確信とに由れり」と言つてゐる。彼の福音は確信から出たのである。その動機は清かつた。その爲す所は眞實であつた。それは人を喜ばす爲ではなく、心を聖給ふ神を喜ばせ奉らんとして語つたからである。

「我らは汝らを知るごとく、何時にても説教の言を用ひず、事によせて懲責をなさず、(神これを證し給ふ) キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども、汝らに他の者にも、人よりは譽を求めず、汝らの中にありて、優しきこと、母の己が子を育てやしなふ如くなりき」とある。眞實と眞實とは兩立しない。我らは人の金銀、衣服を賣りし事なし(使二〇・三三) 彼の潔白を此處に見る。深き皮相の心である。福音の種を受容れないのではないが、下が固いから深く根を下すことが出来ない。御言をききて、直ちに喜び受くれども、己に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言のために艱難、あるは迫害の起るときは、直ちに躍くものなり。(マタイ一三・二〇、二二)

皇軍慰問の 児童演藝會

戰場を 楽しむ心境

- 昭和十二年以來、皇軍慰問に微力を盡しつゝある救世團報國茶屋(現在北支濟南に在り)は、去る七月二十七日午後、濟南に於ける邦人基督教會(日本基督教、聖朝、朝鮮の三教會)の可憐なる日曜學校生徒十數名によつて皇軍慰問の演藝を催したが兵隊さん達、おすな／＼の盛況であつた。當日の演藝會順序左の如し。
- 一合唱 全堂
- 一みもとに行かん (舞踊)
- 一ハルモニカ獨奏 (同上)
- 一浦邊 (舞踊)
- 一時吟 (同上)
- 一荒城の月 (舞踊)
- 一沙漠の月夜 (同上)
- 一仲良し (同上)
- 一アブラコ朝舞 (同上)
- 一餘興 (同上)
- 一和洋合奏(ヴァイオリン)



「高地」の一節に「僕等は幾度か弾雨をくぐり、忘るることの出来ないものがあつた。敵の銃砲聲は、最初は心地のよいものではあるまいが、屢屢聞いてゐるうちには、子守唄ぐらゐにしか感じないといふのである。激しい敵機の對地射撃も、可笑しい位に平気で居られるといふのである。戰場を楽しむ心境になるといふのである。それは實感であつて、空想ではない。

× 斯く幾度か弾雨をくぐると生死の間を往來する度胸がすわつて来るものと見える。戰場に於ける此の経験を以て、有ゆる艱局に處したならば、それを突破することが出来るであらう。聖書に「汝らが靈を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦ひ、凡ての事において、逆ふ者に驚かされぬを知ることを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡の光、なんぢらには救の光にて、此は神より出づるなり。彼等はキリストのために、管に彼を信するのみならず、また彼のために苦しむ事をも賜られたらばなり。汝らが遭ふ戦闘は、曩に我の上に見しところ、今また我に就きて聞くところに同じ。」とある。

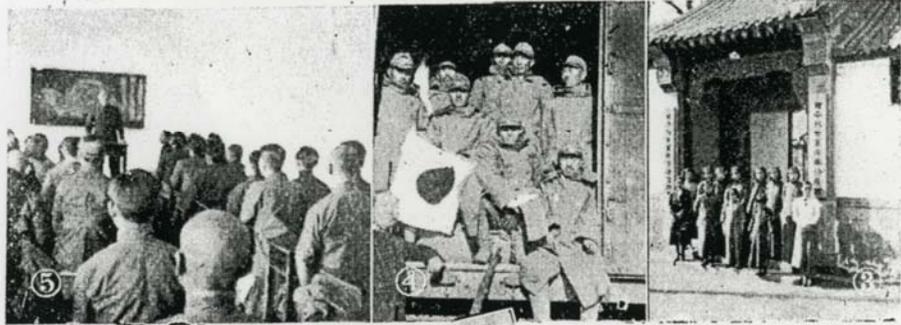
× 砲撃すれし者は、銃砲聲に驚かないのである。對地射撃に出遭うても、平気で居られるのである。私共は救世團の戰場に立ち、苦難を忍び信仰を堅持して、その使命を實踐しよう。



「高地」の一節に「僕等は幾度か弾雨をくぐり、忘るることの出来ないものがあつた。敵の銃砲聲は、最初は心地のよいものではあるまいが、屢屢聞いてゐるうちには、子守唄ぐらゐにしか感じないといふのである。激しい敵機の對地射撃も、可笑しい位に平気で居られるといふのである。戰場を楽しむ心境になるといふのである。それは實感であつて、空想ではない。

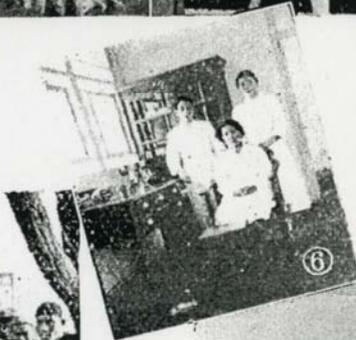
× 斯く幾度か弾雨をくぐると生死の間を往來する度胸がすわつて来るものと見える。戰場に於ける此の経験を以て、有ゆる艱局に處したならば、それを突破することが出来るであらう。聖書に「汝らが靈を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦ひ、凡ての事において、逆ふ者に驚かされぬを知ることを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡の光、なんぢらには救の光にて、此は神より出づるなり。彼等はキリストのために、管に彼を信するのみならず、また彼のために苦しむ事をも賜られたらばなり。汝らが遭ふ戦闘は、曩に我の上に見しところ、今また我に就きて聞くところに同じ。」とある。

× 砲撃すれし者は、銃砲聲に驚かないのである。對地射撃に出遭うても、平気で居られるのである。私共は救世團の戰場に立ち、苦難を忍び信仰を堅持して、その使命を實踐しよう。



5) 日本救世軍
濟南日語講習所の教室

(1) 德州の「救世軍
報國茶屋」
(2) 濟南の「救世軍
報國茶屋」に聽入る
皇軍勇士
(3) 日本救世軍濟南
日語講習所女生
徒の一部
(4) 明治節を北支の
貨車内で迎ふの
左下は瀨川大佐



(6) 日本救世軍濟南
診療所の診察室



(8) 「救世軍報國茶屋」で
支那人に理髮奉仕



(7) 「救世軍報國茶屋」
の齒科治療